

ベルギー 奇想の系譜

ボスからマグリッド、ヤン・ファールまで
Bunkamura ザ・ミュージアム 2017.07.15～09.24

現在の「ベルギー」やその周辺では、アートは中世末期から発達した伝統の写実的描写の上に、幻想的なテーマの絵画が生み出されていた地域である。



本展では、500年余にわたる幻想的な世界を作りだした一連の流れの「奇想」ともいえる系譜を、16世紀の「フランドル絵画」から、19世紀の「象徴派」、そして現代の「コンテンポラリー・アート（現代美術）」の作品にいたるまでの「名画作品」を、国内外の優れたコレクションにより展示・紹介する催事である。

第一人者の「ヒエロニムス・ボス」(1450頃～1516)は、中世から近世への過渡期の時代相を写した奇想の画家で、オランダ絵画に新しい道を拓いた革新者であった。

ボス工房? 《トゥヌダルの幻視》 板/油彩 1488年以降 ポスターの写真

本作品は、ボス工房作かボスの後継者の作品と見なされて、トンダロが幻視する煉獄、地獄には灼熱の炎と身の凍る氷、それにとても巨大な怪物が人々を苦しめるモチーフで、7つの大罪を犯した人々に対応する「罰」を受けている。

ピーテル・ブリューゲル(父)《大食》(七つの罪源シリーズ) 版画(1558年)



キリスト教の教義や16世紀の欧州の諺に基づいた寓意として描かれたもので、人間、聖者、怪物がひしめき合う様子は異様である。

画伯は、単に奇異ではなくユーモラスの怪物たちは、人間の心に潜む欲望を体現したものとされ、緻密な観察に裏打ちされた洞察力で愛すべき「人間の表と裏」を証言している。

ルネ・マグリッド(1898～1967)は、20世紀ベルギーを代表する文化的ヒーローとして地味な芸術家で、比較的小さな絵画を毎日規則的に描き続けていた。

画伯の作品は、目の前の現実を誰にも誤解のないように、わかり易く表現することに努力を傾注し、このスタイルを数十年間ほぼ変わらず守り続けていた。

ヤン・ファール(1958～)は、早くから「フランドル絵画」に親しんでその影響を受けた画家で、青インクのボールペンで表面を青く埋め尽くしたドローイングで名高く、長年にわたり自分のルールに従って、同じキャラクター・シンボル・モチーフを繰り返し用いて、自分の世界を作り上げてきた芸術家である。